

- 注(2) 升目は、口に含み得る分量などが単位となった。寛文9年〔1669〕統一がはかられるが、なお各種各様の枡が使われた。
- 注(3) 秤量は、金・銀・銅・貴薬などをはかるため、厳密性・同一性が要求された。室町期に唐の開元銭1文の重さを文目〔もんめ。後の匁〕とした。これが最近まで使われてきた1000匁＝1貫の制のおこりである。なお、匁は国産養殖真珠の秤量単位として現在国内は勿論国際的にも通用している。
- 注(4) 冠木が二柱の上部を貫いた、屋根のない門で、株木門とも書き、衡門ともいう。冠木とは門柱の上部を貫く横木のことで、柱の頂上より少し下にある点が笠木と異なる。なお、封建社会では、身分・階級の格差に応じて、住居や門構え等の規格が厳重に定められていた。
- 注(5) 通称伊三郎。伊達家の家臣だったが、明治後捕亡吏となり、大童信太夫・松倉恂等江戸に潜伏中の旧家臣の探索逮捕に従事、東京赤坂小区長から、静岡県十一等出仕となったが、明治6年辞職。秤商となったのはその後のことらしい。明治27年8月2日歿、仙台市越路長徳寺に葬る。

資料 仙台市史第1巻

仙台昔語電狸翁夜話（伊藤清次郎）

仙台人名大辞書（菊田定郷）

東一番丁物語（柴田量平）

秤座（林 英夫）

## 11. 東北地方における最初の電燈

問 東北地方で、最初に電燈がついたのはいつですか。また、それはどこですか。

答 明治21年7月1日、仙台三居沢〔当時宮城郡七北田村荒巻〕の宮城紡績株式会社が、自家発電によって工場内に点燈したのが、東北最初の電燈です。この工場は、明治12年設立され、広瀬川の水力を原動力とした綿糸紡績の近代工場でした。これは、明治新政府の勸業政策に沿って、菅克復(か)〔かんとくふく〕が宮城郡長在職中に企画した事業で、彼は職を辞して自らその経営に当たっていました。

明治19年、東京浅草で東京電燈会社が、わが国で初めて、一般電燈営業を開始しました。当時の新聞が報道した『電燈の光力、夜なお昼の如し』のニュースに心打たれた菅克復(1)は、この画期的な文明の燈火を一日も早く導入して、郷土に活を入れたいと念願したのです。やがて、翌20年12月15

日に東北線が仙台に乗り入れました。菅はそれを待ちかねたように、金須〔きす〕松三郎等の有志と  
ともに上京しました。実地に電燈事業を視察した一行は、先輩の日銀総裁富田鉄之助を訪ねて、企  
業化についての意見を求めました。富田鉄之助は、仙台ではまだ時機尚早であると慎重論を説いた  
ので、金須らはそのまま帰仙しました。しかし、菅は自分の経営する紡績工場だけでも点燈しよう  
と決意し、一人居残って、芝三田四国町の三吉電機製造会社に、発電機と、アーク燈 1 基・10 燭光  
電球 50 箇を発注しました。

菅は到着した発電機を、工場の水車の車軸に直結して、5 KW の発電に成功しました。工場内に  
50 箇の電燈を、取水口のある烏崎山上に燦然たるアーク燈を点火したのです。菅克復の執念が美事  
に実を結んで、東北に始めて文明の火がともった記念すべき日、明治 21 年 7 月 1 日のことでした。  
開闢以来始めて見る電光の驚異に、人々は、狐火だと騒ぎ出し、警官が出動してようやく取り鎮め  
た程でした。

市民一般に電燈が供給されるようになったのは、それから 6 年後のことでした。明治 26 年、突然  
他県人による電燈会社の設立計画が発表されたのをきっかけに、菅克復・佐藤助五郎・伊藤清次郎  
が、これを排除するため、急速、地元人による発送電事業を具体化することになったのです。とり  
あえず、三居沢の宮城紡績会社の資本金を 50 万円に増資し、製糸及び発電を兼営することとし、宮  
城水力紡績製糸株式会社と改称して、30 KW の発電機を据付け、明治 27 年 7 月 15 日から、配電のため  
新設の仙台電燈株式会社へ送電を開始しました。こうして、仙台電燈株式会社はその電力を受け  
て、市内家庭の 365 燈に点燈しました。電燈見物の群集が町中に溢れ、お祭のようなにぎわいだ  
ったといわれます。東京に遅れること 8 年でしたが、東北では勿論最初であり、全国的にも早い方  
でした。また、他地方のは火力発電が多かったのに対し、水力かつ交流方式であったことは、特筆す  
べきこととされています。料金は 10 燭光半夜燈 80 銭、同終夜燈 1 円 24 銭でした。

明治 32 年 10 月、両社は合併して一本化し、宮城紡績電燈株式会社と改称しました。その後も、需  
要の急増にこたえて施設を増強し、供給区域も市内はもとより、周辺 6 町 4 箇村にまで拡大しまし  
た。大正元年 12 月 24 日、電気事業の全部を仙台市に譲渡して解散しました。同期末の発電能力は水  
力発電所 3 箇所で 2,440 KW、電燈 35,158 個で、仙台市営電気事業の母体となったものです。

注(1) もと、一関田村家の家臣で、幼名を一〔はしめ〕といった。明治 2 年仙台藩少属、同 11 年  
宮城郡長となり、良吏として名声があった。在職中、三居沢の紡績工場設立について努力  
したが、明治 16 年操業開始の時郡長を辞任してその経営に当たった。また、電気事業の開発  
に心血を注いで成功した。明治 25 年には仙台市議員に当選し、第 3 代議長〔明治 26 年 1 月  
27 日～32 年 12 月 31 日〕に挙げられた。産業の開発と市政の発展に貢献するところがまこと  
に大きかった。大正 2 年 2 月 20 日歿、77 才、北山覚範寺に葬る。

注(2) 代々伊達家に仕え、富豪で聞えた。松三郎は最も貨殖に長じ、その富仙台一と称せられた。  
維新後、製艦費として 1 万円を献金した。明治 23 年、多額納税貴族院議員となる。地方産

業の開発振興にも寄与するところ多く、資性温厚、大人の風格があった。明治27年3月20日歿、52才、新寺小路洞林寺に葬る。

注(3) 諱は実則、鉄畊と号した。天保6年10月16日、仙台市良寛院丁に生れた。桃生郡小野邑主富田壱岐の4男。22才の時江戸に上り、勝海舟の塾に入り、西洋砲術・航海術・蘭学を修めた。慶応3年アメリカに留学し、明治元年帰国した。ニューヨーク総領事・英国公使館一等書記官・大蔵大書記官を歴任し、日本銀行創立業務を担当し、同行副総裁から明治21年第2代日銀総裁に親任された。翌年松方大蔵大臣と意見が合わず辞職した。23年貴族院議員に勅選された。24年東京府知事に任ぜられた。最大の業績は、従来神奈川県に属していた3多摩郡〔水源地〕の東京府編入に身命をかけて実現し、首都百年の水道事業を確立したことである。27年辞職後は財界に活躍し、富士紡績株式会社・横浜火災保険会社を創設した。郷土の後輩育成には最も熱心で、巨額の私財を基金として、明治14年には仙台造士義会、19年には東華義会を創立した。造士義会はわが国でも、きわめて早期に組織化された育英会で、その学資貸与を受けて多くの人材が世に出ている。また、東華義会は、明治19年に東華学校、37年に東華女学校を設立し、公教育の立後れた宮城県中等教育を発展させた。東華学校は明治25年4月新設の宮城県尋常中学校〔現宮城県仙台一高〕に引きつがれ、東華女学校は大正10年宮城県第二高等女学校〔現宮城県二女高〕に吸収合併された。常に詩書を好み、その漢詩は風韻に富み、人となりきわめて謹厳高潔であった。金銭的にも潔癖そのもので、日銀総裁辞任の際政府が贈ろうとした功勞金5万円、横浜火災保険会社からの贈与金10万円、退官後の恩給等すべてを辞退して受けなかった。大正5年2月27日歿、82才、東京小石川護国寺に葬る。詳伝に「忘れられた元日銀総裁―富田鉄之助伝―」（吉野俊彦）がある。

注(4) 幕末頃の仙台の巨商で伊達家の御財用方用達主立〔おもだち〕を勤めた佐藤助右衛門〔飢饉時に私財を投じて難民を救済したので、「お助けさま」と呼ばれ、大衆の感謝的となった人物〕の曾孫で、佐助呉服店5代目の当主だった。明治14年東京商業講習所〔一橋大学の前身、その創立には富田鉄之助も力を尽した。〕に学び、21年渡米イーストマン大学に留学した。新知識を得て24年帰仙。彼の最初の事業は佐助銀行と呼ばれた仙台銀行の設立であった。資本金10万円だったが、最盛期には70万円の預金があった。彼はこの金融機関を足場に、産業部門に手を広げた。仙台平・倉庫・屋根瓦・電力など7つの会社の経営権を掌握し、七福会と名付けてその発展に努めた。この中に、菅克復の紡績工場も含まれていた。仙台電燈株式会社の設立とその拡充、紡績工場の拡大、ビール工場の新設、市内電車計画等、次々と事業計画が実現の端緒についた時、彼は突然謎の自殺を遂げてしまった。明治29年12月6日、30才の若さであった。

注(5) 仙台の富商小西家の第7代利兵衛の孫。小西家は、本来伊藤の姓を名のるべき家系なので

7代利兵衛は二男清治を分家させるに当って、200両を医学校に献金して、彼を金上待〔かねあげさむらい〕とし伊藤家を再興させた。清治の二男が清次郎で、宮城紡績会社役員・宮城紡績電燈株式会社の社長などとなり、仙台市会議員にも当選した。菅克復らとともに電気事業には特に力を尽した人で、自ら「電狸」〔でんたぬ、電気狸の意〕を号した。彼はすぐれた記憶力と広い見聞をもとにして「仙台昔語電狸翁夜話」（大正14刊）を述作している。この書は、郷土史を研究する者にとって不可欠のものとなっており、土屋喬雄〔仙台出身〕や本庄栄治郎の日本社会経済史に関する著作にも、資料として利用されている。昭和13年11月13日歿、83才

宮城県図書館のすぐれた特別集書に「小西文庫」と称するものがある。これは、昭和10年伊藤清次郎の80才高齢記念として、小西家11代の利兵衛が、同家在来の蔵書に加えて伊藤家の医員で文人だった飯川勤〔寥廓と号し、伊達慶邦夫人の侍医。蔵書家として著名。明治35年5月30日歿、65才、燕沢善応寺に葬る〕の旧蔵書を買入れて整理したものである。歴史・医書・詩文・郷土資料など、悉く稀本・良書・善本といわれるものの集成で、きわめて保存がよく、1,619部4,431冊から成っている。「伊藤清次郎翁八十歳高齢記念小西文庫」と称して、小西家に秘蔵されていたものを、戦後一括寄贈されたものである。

注(6) 当時の物価は、米1俵4円50銭、石油1罐2円位で、10燭光1燈で1円24銭を支払えるのは、一部の階級に限られていた。大正元年には10燭光85銭となった。ちなみに、昭和44年度の消費者米価は1俵8,256円である。

資料 東北地方電気事業史（東北電力株式会社）

仙台昔語電狸翁夜話（伊藤清次郎）

続仙台風俗志（鈴木省三）

仙台市電気事業史（仙台市）

仙台市史第3巻

続東北開発夜話（岡田益吉）

## 12. 松島パークホテル

問 建築史の勉強をしているものですが、国立公園松島のパークホテルについて、次のことを教えてください。

1. 建築の設計をオーストリア人ヤン・レツルに依頼した経緯
2. ホテル建築の工期・工費・建設位置